



師走の朝-本校校舎より新宿方面を望む

クリスマスメッセージ

言は肉となつて



チャブレン 市原 信太郎



教会では、クリスマスを祝う始めた時から「イエスの誕生日」を祝っていたわけでは
ありません。そこで祝われていたのは、「受肉」、今日読ま
れた「言葉が肉となった」と
いう事実です。神である存在
が、地上に人間として降り、
人となった。このことを教会
はクリスマスとして祝ってい
るのです。

「今年の十大ニュース」な
どが話題に上る時期ですが、
わたしの記憶に残ったのは、
東京オリンピックのエンブレ
ムが海外の劇場のロゴマーク
と似ているということを取り
下げになり、再公募すること
になったという問題です。個
人的には、東京オリンピック
の年、一九六四年に生まれた
ということもあり、二〇二〇
年に東京でオリンピックが開
かれることに対して個人的な
思いもありますので、この騒
動は残念に感じました。

「神の理想の世界」を現実
世界の中にどう築き上げるの
か、クリスマスはその具体的
な責任を担うことをわたした
ちに要求するのです。わたし
の希望は、ピーター・ノーマ
ンが望むように、「僕の代わ
りにそこに立つ」人として、
君たちが自分の立場を選び歩
んでいくことです。そこに、
クリスマスの希望があると
思っています。

振り返ってみると、オリ
ンピックという場にはこの種の
政治的な不条理がつきまとい
ます。高校時代、ロシアのア
フガニスタン侵攻に抗議し
て、日本を含む西側諸国が一
九八〇年のモスクワ五輪をボ
イコットしました。選手たち
がこの決定に涙ながらに抗議
する姿を記憶しています。続
く一九八四年のロサンゼルス
五輪は、今度は報復措置のよ
うな形で東側諸国がボイコッ
トを行いました。また、小学
校の低学年でしたからその時
には意味が理解できていな
かったのですが、一九七二年
のミュンヘン五輪ではイスラ
エル選手団の選手十一人がパ
レスチナ武装組織によって殺
害されるという事件も起きま
した。

「表彰台では黒い手袋をは
めました。この年、オリ
ンピックが初めてカラー放送され
たからです。ですから、我々は、
まず自分たちが誰の代表であ
るかをはっきりさせたいかっ
た。我々はまず自分たちの人
種の代表であり、次に米国の
代表していました。(中略)

「インタビュー出典:「オリ
ンピックに斬り込んだブラッ
クパワー」『アフリカンアメ
リカン・フォーカス』ブログ
http://aafocusblog.blogspot.
jp/2012/08/1968_4.html

これらに加え、君たちに一
九六八年メキシコ五輪で起き
た出来事をぜひ知ってもらい
たいと思います。これは政治
的にとらえられる出来事では
あつても、選手の側から起き
た動きであるという点で、性
格を異にするものです。

次に、私はUSAのユニ
フォームの上に黒いシャツを
着ました。なぜなら、正直言っ
て、私は米国の行為に恥じ
入っていたからです。米国の
史上行ってきたこと、そして
特にあの頃、米国の我々に対
してやって来たことに。その
気持ち表現したかったのだ
です。小学校の頃から、この国
は自由の土地だと教えられて

「前日の天気予報では雨で
あつたが、当日曇り空でマ
ラソン大会を走るにはとて
も良いコンディションだつ
た。自分が走る距離は事前
の申し込みで決めるが、今
回半数くらいがハーフマラ
ソンに申し込んでいたため
とても挑戦的なレースだつ
た。アップや準備体操は個々
で行い、スタート地点には
時刻までに各自で集合する
形式だった。寒さ対策・雨
対策をして走る者もいた。
レース開始後はそれぞれ
ペース配分を守って友達と
一緒に走ったり、全力疾走
したりと、仲間でも個人で
も完走することができた。
コースはほとんどが直線
だったため、何キロくらい
自分が走ったのか分かった
ため、途中で止まってい

野原の規模の地方自治体には
過度な負担となり、後継の知
事が財政的に大きな苦勞を強
いられたことなどです。ス
ポーツを軸に世界の人が平和

「表彰台では黒い手袋をは
めました。この年、オリ
ンピックが初めてカラー放送され
たからです。ですから、我々は、
まず自分たちが誰の代表であ
るかをはっきりさせたいかっ
た。我々はまず自分たちの人
種の代表であり、次に米国の
代表していました。(中略)

「インタビュー出典:「オリ
ンピックに斬り込んだブラッ
クパワー」『アフリカンアメ
リカン・フォーカス』ブログ
http://aafocusblog.blogspot.
jp/2012/08/1968_4.html



マラソン大会に参加して
—高1第三八回府中多摩川マラソン大会—
高1 中田 昌輝

中学一年便り

耳を傾ける

中学三年生の頃の話を。僕はすべてのものに価値はないという虚無感に悩まされていた。日々の学校生活ではいつも受動的だった。いや、一方通行型の授業スタイルで受動的になることを学んだのかもしれない。成績さえよければある程度周囲から認められるので、定期テストくらいは努力していた。傲慢だった。

当時友人たちと奇妙な習慣に陥った。休み時間の度に学校のカフェテリアに行き、水を飲みながら雑談をして教室へ戻るという習慣である。学校という狭い空間の中でも優位な地位にいる彼らと一緒にいると威勢がよくなった。

ある日、帰りの学活に集団で十分以上の遅刻をした。カフェテリアで無駄話をしすぎて時間を忘却したからである。担任の先生(体育科のペテランの先生)が厳粛な声で言った。

「全員廊下に立っている。お前らに話がある。」

廊下に一列の状態全員が正座をさせられ、一人一人説教をされた。どういっわけか、その集団の中で僕だけ十分以上も叱られた。

「お前は勉強さえできていればいいのか。周囲に流されて自分を失ってないか。」

完全に見透かされていた。バットで思いっきり殴られたような強烈な衝撃だった。真剣に語ってくれる先生を前に、涙がぼろぼろと頬を伝って落ちた。

中学一年生の皆、周囲に流されて自分を見失ってないか。判断を他人に委ねていないか。学校生活への慣れは時として危険を伴う。一生懸命語りかけてくれる人には耳を傾けるべきなのかもしれない。

(小林 隆史)

中学二年便り

留学動機

立教では、中、高、大とそれぞれで多彩な海外プログラムや留学制度が用意されている。留学の話題になると、「留学はしたほうがいい」という前提で話が進むことが多いように思われるが、ここでは、そもそもなぜ留学をするのか、について考えてみたい。

留学の動機でよく挙がるのが、語学力の向上、異文化の体験、海外でのインターン、ボランティア経験を得る、などであろう。一方で、世間的に留学が良いと言われているから、留学する。今の時代、留学は当たり前だからする。そのような理由を持っている人もいるかもしれない。はたして、そのような理由で海外にでるべきなのだろうか。留学の動機においては、何よりも大事なのは、自分自身が留学したいかどうか、だと個人的には思っている。

私自身も大学二年生の夏から、サンホゼ州立大学に一学期間(約五か月)留学し、心理学を学んだ。厳しいと言われるアメリカの大学で、日本人である自分がどれだけやっていけるのか、試したかったのが大きな動機であった。結果として自分でも努力をすればやっていけるといふ実感を得て、また留学したいと思えるほどの満足感を持ってた経験となった。自分がこう思ったのも、留学したい理由が自分の中にあるからだろう。他人から強制されたわけではなく、なんとなく海外に行きたいわけでもなく、自ら進んで留学を選んだのである。

留学してよかったと思えるかどうか、それは留学する人の気持ちにかかっている。なぜ留学をするのか、留学を考えている人には、ぜひ一度立ち止まって考えてもらいたい。

(志水 元)

中学三年便り

時間

二〇十五年もあと少しで終わろうとしている。この一年間があつたという間違ったと感じる人もいれば、とても長く感じた人もいるのではないだろうか。

中学三年生のみなさんは、覚えていられる人がいるかもしれない。昨年の清里キャンパスで「時間」についての話の中で、時計やチャイムの音に合わせて行動しながら「時間」の存在を気にすることはあっても、私たちが過ごしている「時間」そのものに目を向ける機会は少ないのではないだろうか。

楽しく過ごす時間、苦しくて長く感じる時間、ただ何気なく過ごしている時間、平等に流れている。そして、当たり前のことではあるが、どんなに帰りたかと思っても時間巻き戻すことはできない。そうと分かっているながらも、きつと誰もが一度は「あの時に戻れたら」と考えたことがあるのではない。

今、この時間をこうして過ごすことはもう二度とないと思える。少し寂しさを覚えるのと同時に、過ぎ去っていき一瞬を大切にしていきたいと感じる。どんなに楽しい時間も、どんなに苦しい時間も、時間を巻き戻すことはできないからこそ、後悔のない時間を過ごして欲しいと思う。

未来に思いを馳せたり、過去を振り返る機会はたくさんあるが、そのすべてで作っていくのは今の自分であり、この一瞬であるというのを思い出してほしい。

新たな年を迎えようとしているこの時に、また改めて私たちが過ごしている「時間」について考えてみてはどうだろうか。

(富部 明音)

高校一年便り

よく見る

「絵を描くのに大切なのは、ものをよく見ることだよ」私の祖父は絵や工作がとても得意な人で、子供の頃いろいろなことを学んだ。中でも一番心に残っているのが、冒頭の教えだ。

考えてみれば至極当然のことを言っている。描く前にはその対象を見なければならぬ。見るといっても、ただ見るのではない。注意深く観察する、見る角度を変え、対象の表面だけではなく、その内側にある本質を掴む。そうして初めて、次の描くというステップに進むことができる。

それこそ、私たちはよく、見ることを怠る。太陽の色は天気や時間帯で変わるのに、肌の色は文字通り十人十色なのに、太陽を描けと言われればつい赤を選び、人を描けと言われれば迷わず肌色(最近の呼び方ではうすオレンジ色)を塗ってしまう。

これは絵を描くときだけに言えることではない。これはこういうものだと心のどこかで決めてつけて、それ以上よく見ることを怠ってはいないだろうか。

苦手な授業、友達との距離、自分自身の可能性。無意識に決めつけてしまっているものにも、必ずまだ知らない一面がある。改めてじっくり観察することで、それを見つけ出すことができるはず。

高校一年生、大人への一歩手前。「よく見る」という行為が、君たちが更に大きく成長するための最初のステップだ。

(中仙道 優真)

高校二年便り

Gift

一人ひとりが神様から与えられた個性や才能。それは、みんなちがっています。そのちがいが、すばらしいのです。

立教池袋では、それぞれのGiftを見だし、それを伸ばしていくことを大切にしています。

もともとみんなちがっているのですから、比べて優劣をつけることは意味を持ちません。むしろ、その一つひとつを認め合い、併せることによって、豊かな世界をつくるのが可能なのです。

そして、そこにいる一人ひとりが、かけがえのない大切な存在として生かされているのです。

「体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、「わたしは手ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょう。耳が、「わたしは目ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょう。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。」(コリンズの信徒への手紙12章14節)

(初瀬川 正志)

高校三年便り

外国語を学ぶということ

君たちは興味があるだろうか。なろうが、少なくとも六年間、英語という外国語を学び続けている。そして、大学に進学する人はこの先の四年間も、さらに就活の時、あるいは社会人になってからも人生のありとあらゆる場面で英語がついて回る。こうやって強制されると、ある人は(テストの)数字を取ることに躍起になり、またある人はなんだかやる気が起きなくなる。どちらも本質を見失ってしまっているように思われる。

確かに資格試験の点数を取ることは学習の目標にはなりうるが、それが学習の目的になってしまっている。もちろんにも味気ない。外国語を学習するためのもつと内発的な目的を探ってみてほしい。

外国語を身に着けることは、自分の中の新しい「窓」を開くことであると私は思っている。

(中川 太郎)

思っている。母語である日本語の窓を通して見る景色は美しい。しかし、外国語私の場合(英語)の窓を通じて見る景色は、また違った美しさを持っているのかもしれない。外国語を勉強し身に着けることで、これまで出会えなかった人と出会い、これまで見ることで、これまでできなかった世界を見ることができるようになる。翻訳を介さず、自分自身が外国語を使っている。直接関わらなければできない体験こそが、外国語学習の喜びである。

これから先、大学に進学し英語以外の外国語に出会う者も多いだろう。ことばを学ぶときは、是非とも「そのことばを通して見える世界」に目を向けて、喜びを感じながら学んでほしいと思う。



十字 今月の聖句

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕(しもべ)の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」(フィリピの信徒への手紙2章6-8節)

クリスマスは、ここに言い尽くされている。人間としてのちを与えられた者であることの喜びと責任を自覚しよう。